

二国間交流事業 共同研究報告書

令和4年4月30日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
鎌倉女子大学・教育学部教育学科
[職・氏名]
教授・牧野久実
[課題番号]
JPJSBP 120198406

1. 事業名 相手国: イスラエル (振興会対応機関: ISF) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) ヘレニズム時代のエン・ゲヴとヒッポス〜居住史に関する共同研究(英文) The Hellenistic settlement at Tel Ein Gev and the beginning of settlement in Hippos3. 共同研究実施期間 令和元年4月1日 ～ 令和4年3月31日 (3年0ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

University of Haifa・senior researcher at the Zinman Institute and a
senior lecturer at the Department of Archaeology・EISENBERG
Michael

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		2,111,261 円
内訳	1年度目執行経費	1,666,322 円
	2年度目執行経費	444,939 円
	3年度目執行経費	円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	3名
相手国側参加者等	2名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	3		1(1)
2年度目	0	0	0(0)
3年度目	0	0	0(0)

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣:委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

本研究は、1960年代より行われてきた日本隊によるイスラエル発掘調査のうち、これまであまり取り上げてこられなかったヘレニズム時代の遺物、特に日本隊が発掘したエン・ゲヴ遺跡とイスラエル・ハイファ大学が発掘した近隣のヒッポス遺跡から出土した古典期の遺物を比較研究し、横断的な視点から古典期の物質文化の様子を明らかにしようとした。

当初の予定では令和2年4月1日～令和3年3月31日だったが、コロナ感染症問題により2年目の事業が実施できなくなり、繰り上げ申請したうえで令和4年3月31日を実質的な終了期間とした。本研究では、発掘資料を扱う点や、両遺跡の発掘関係者との交流などを内容に含むため、渡航が必須となる。そこで、2年目に続く3年目も渡航の機会を伺っていたが、残念ながら現時点まで困難な状況が続いている。従って、ここで報告する概要の大半は研究の1年目で行ったことであり、2年目については、1年目の成果を踏まえて行った研究内容、そして3年目については新たな展開というよりも、それまでの研究成果についての出版作業に留まった。

エン・ゲヴ遺跡では1990年より2004年まで、途中6年間中断を挟んで8次にわたる調査が日本聖書考古学調査団によって行われたのち、2009年より2011年まで慶應義塾大学民族学考古学研究室によって調査が行われた。一方、2000年より現在までハイファ大学によって発掘調査が行われてきているヒッポス遺跡はエン・ゲヴ遺跡から3キロほど東に位置する。ヒッポス遺跡はヘレニズム時代後期から居住が始まり、ローマ時代に都市が大きく発展した。両遺跡における居住の変化とその関連性を知るためには、相互の出土遺物の検討が不可欠である。

1年目の活動は事前の計画に基づいて非常に順調に進めることができた。渡航を前提に両国における人的交流を行った結果、キブツ(村)エン・ゲヴに保管された出土資料を10年ぶりに確認することができ、共同研究の前提を整えることができた。また、日本の文化庁にあたるイスラエル考古局との交渉も始まり、日本での展示開催に向けた準備が具体的に進められた。同時に、イスラエルが得意とする出土資料の教育普及への活用についても具体的に知ることができた。こうしたプロセスにおいて、エン・ゲヴ出土土器の胎土分析のため、ハイファ大学の各専門家との交流も順調に進み、土器片の選定と分析用の薄片作成作業も1年目の末、コロナ禍が蔓延する直前に済ませることができた。この成果はその後共著論文として作成し、刊行までに時間を要したものの3年目末に校正にこぎつけることができた。

エン・ゲヴ、ヒッポス両遺跡の土器資料についてはそれぞれ報告書が刊行されている。エン・ゲヴについては和文のみであったが、ちょうど発掘代表者が英文報告書の刊行を目指した手続きに入っていたため、牧野担当分のヘレニズム時代土器資料について英文を作成し、情報共有のための手段として刊行を待った。ただ、コロナ禍のためか刊行に長時間を要しており、3年目末の段階においても出版に至っていない。

当初計画していた資料検索・比較がどこからでも可能な遺物データベース構築の試みについては、すでにヒッポスがシカゴ大学のデータベースへ情報提供していたことから叶わなかった。ただし、牧野がこれまで構築してきた非公開データベースにヒッポスの遺物情報を組み込むことで、比較研究のベースを構築した。また、エン・ゲヴ遺跡出土物については関係者の許可を取ったうえでデータの一部を鎌倉女子大学のウェブサイトを通じて期間限定で一般公開することを実践し、そのプロセスを2,3年目で学会発表、および論文として発表することができた。考古資料についてはデータの著作権などクリアすべき課題が多いものの、少なくとも技術的に可能であり、また実際にどのような場で役立つのかを確認す

ることができた。

計画当初は、ヒッポス遺跡の遺物については日本国内において初の展示を試み、これに合わせて、アイゼンベルグ氏（及び、研究の進捗状況に応じてヒッポス遺跡発掘関係者または考古局関係者1名）を日本に招聘し、研究会および公開講演会を実施することを予定していた。実施に向けて、1年目では会場確認や資料の選定、展示用パネルの作成、講演会プログラムやパンフレットの印刷と順調に準備を整えた。相手国研究者も来日し、人的交流に加えて研究計画の詳細を話し合うことができた。

しかし、これらの計画を実行するはずの2年目においてはコロナ禍によって見直しを余儀なくされた。講演会参加者の来日はもとより、ヒッポスの遺物は人が運ぶということが条件であったため、新たな資料を日本へ持ち込むことも叶わなくなった。展示については、予定していた3か所の館のうち国士舘大学附属博物館は閉鎖となり、鎌倉歴史文化交流館では当初予定していた学生ボランティアの配置が感染防止の観点から困難となり開催には至らなかった。しかし、1館（古代オリエント博物館）では延期の上で2年目末に展示が実施された。一方で、Zoomなどを用いた遠隔手法の新たな導入により、当初は予想しなかった形での公開講演会の実施が実現できた。参加者は100名を超え、こうした形で開催できたことについて非常に良かったと感じる。

講演会に先んじた1年目の後半、イスラエルで得た遺跡の教育普及活動に関する知見に基づく活動を鎌倉女子大学の学生たちとともにに行った。具体的には遺跡の模型作成であるが、コロナ禍の直前までの数か月間、集中的に行った。その結果、活動を通じて学生たちが見知らぬ地域や時代の文化について理解を深める様子を観察することができた。2,3年目ではこうした学習効果について学会で発表し、その後論文化した。共同研究当初より展示活動を主軸の1つに据えていたのは、遺跡の価値を広く共有するという目的があったが、教育現場において大きな課題となっているアクティブラーニングの側面においてもこうした成果があることがわかり、研究の新たな主軸として導入することにした。この活動において重要な役割を果たした共同研究者である高見妙氏には、イスラエルにおける遺跡の教育普及の仕組みについてぜひ現地で知見を高めてほしいと希望していたが、残念ながら渡航が叶わなかった。しかしながら、いくつかの共著・単著論文を作成したことで、今後に向けてさらなる展開が期待できる。

当初予定には、共同研究者である江添誠氏がヒッポス遺物に関する現地調査と土器3Dモデルの試作を行う予定であった。1年目にヒッポス遺物に関する初歩的な現地調査を済ませ、3Dモデル試作のための機器も購入し、その後の具体的な作業に向けて準備を整えた。しかしながら、その直後にコロナ禍に見舞われ渡航が中止になったことで計画を中断せざるを得なかった。また、2,3年目に遺物の調査結果を公表する場としていたオックスフォード大学での学会発表が続けて中止となったことや江添氏が非常勤を兼務し研究拠点の1つとなっていた国士舘大学附属博物館が閉鎖となったことも予想外の展開であったが、少なくとも今後に向けてすぐに研究再開できる準備は整ったと言える。

以上のように、研究の柱がイスラエルに保管された考古資料に関するものであるということ、エン・ゲヴ遺跡に関する資料は発掘した日本側研究者の土器保管場所への同席が必須であること、ヒッポス遺跡に関する資料を日本に持ち込む際はイスラエル側研究者および考古局の担当者が直接輸送する必要があること、こうした点から、渡航困難な状況下における研究は中断したまま終了せざるを得ないのが現状である。特に感染症が東アジア由来という情報が流布する中、エン・ゲヴ遺跡出土の土器片が保管されている場所がイスラエル北部の小さな村であるため、今後も当分の間は我々日本人研究者の渡航は困難かもしれない。しかしながら、コロナ禍だからこそ挑戦できた手法もいくつかあったし、実質的な交流ができない中それぞれの立場を駆使しながら研究を前に進めることができたという経験はなにもものにも代えがたい成果と言える。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

研究調査の側面においては、まず先に述べた胎土分析が今後に向けての大きな成果であった。対象としたのはヘレニズム時代の土器片 10 点とローマ時代の石灰窯の断片である。当時、ガリラヤ湖の東西ではギリシア・ローマとユダヤの文化が拮抗していた。そうした中、エン・ゲヴは東岸地域を統治するギリシア・ローマ都市ヒッポスの港町であったと考えられている。その一方で、風や港と水運に適した立地条件を有するエン・ゲヴは、水陸双方において湖西地域との繋がりが想定される。こうした仮説を検証し、エン・ゲヴの社会・経済的役割や民族的位置づけを知るための糸口として今回の分析が行われた。分析の結果、エン・ゲヴの土器が湖の東西両地域産であり、ギリシア・ローマとユダヤの文化の境界に位置づけられること、また、石灰窯は地元の石灰岩由来と判明した。この結果は論文として作成し、まもなく出版される予定である(2022 年 5 月刊行予定)。本来はもっと前に出版されるはずであったが、コロナ禍で作業が大幅に遅れたようだ。これまでにない分析結果であるため、今後に向けての大きな成果と考えられる。

土器資料のデータベースの公開を目指した機関リポジトリを活用も成果の 1 つである。最も重視した点は利用者の設定とこれに沿ったデータベース項目の簡略化である。その結果、専門家ではなく一般の人々を主な対象とし、彼らがより身近に感じられる項目を設定した。なお、こうした簡略化はデータを削除したわけではなく、利用者にとって理解しやすい項目のみを可視化した作業と言える。

結果として、一般にも使いやすいデータベースとして試行できた。事業そのものは途上段階といえるが、新たな課題も検討しながら今後も発展すべきテーマと言える。

また、遺跡を介した教育普及の在り方についても今回の大きな成果と言える。イスラエルではこの分野において早くから多様な試みがなされているが、実際にハイファ大学考古博物館で行っていたヒッポス遺跡の模型活用を現地調査したことから、その手法を国内の学生との活動に取り入れた。遺跡の教育的活用という側面から、また社会科教育におけるアクティブラーニングの導入については日本においても以前から提案されているが、なかなか浸透していないのが現状である。こうした中、遺跡模型を作成しながら古代の生活を自ら調べる作業に参加する学生の姿には、いわば博物館学的分野における教育普及のあり方を考えるきっかけとなった。こちらも学会発表および論文として公表した成果である。

以上のように、今後に向けて発展性のある課題を見つけることもできたことは、短期間の共同研究にあって実り多き成果であったと感じる。いずれも両国からの参加研究者はもちろんのこと、彼らを介して繋がることのできた専門家たちの協力あってこそなしえたことであった。コロナ禍だからこそ挑戦できた手法もいくつかあったし、実質的な交流ができない中それぞれの立場を駆使しながら研究を進めることができたという経験は何物にも代えがたい。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

イスラエルの場合、ユダヤ教だけではなくキリスト教やイスラム教といった宗教的多様性に加え、かねてより多くの移民を受け入れてきた経緯から文化的多様性も存在する。例えば、相手国研究代表者はロシア系イスラエル人だが、関わるヒッポス遺跡にはロシア系、ポーランド系など多様な文化的背景を有する関係者が含まれており、信頼を得るのにある程度の交流の積み重ねを必要とする。また、エン・ゲヴ遺跡出土遺物の保管先であるキブツは自立した集落であるため、比較的閉ざされた社会である。ここでは長年発掘に携わってきた日本国研究参加者との信頼関係は構築されているが、イスラエル人であ

ってもヒッポス遺跡関係者が同様とはいいがたい。

こうした中、イスラエルとの二国間交流事業について印象的だった点は、イスラエル側、即ち ISF 側の考え方として研究成果以上に、交流成果ということに主眼を置いていた点である。ざっくばらんな交流を通じての信頼関係を構築するということこそが共同研究を進めるうえで大事であるという考えに基づいており、最初から研究の骨子について話し合うのではなく、まずは互いの人と文化を知り、情報を共有するという理にかなった仕組みである。例えば外部研究補助金として学術振興会科学研究費の補助金などでも他国との共同研究を進めることはできるが、この場合にはあらかじめ相手方との信頼関係などが構築されていることが大前提であり、ざっくばらんな交流の機会を通じて 1 から関係を結ぶことを科研調査に求めることは難しい。その意味で、今回のような、エン・ゲヴとヒッポスという距離的には近いものの、意見交換をする機会がなかったイスラエル側研究者との交流ができたことは、今後の研究の広がりを予見させる大変有効な芽生えであった。

また、専門分野に限らず広く交流という観点から事業を進めるべく、相手国研究者の来日中に国内大学の考古学授業で遺跡紹介をしてもらったり、遠隔講演を通じて広く相手国の研究を知ってもらったりする機会を得た。日本人参加者の相手国への訪問中には、関連する遺跡の発掘調査を視察する中でより広い人間関係を構築することができた。短期間ではあったが、こうした対面・遠隔による交流はより広範囲な文化的理解を促す非常に貴重な機会だったと感じる。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

最大の成果は展示活動、遠隔講演会、そしてこれらを通じた教育普及活動、具体的には学生と協同で作成した体験学習用資料としての遺跡模型である。既述のとおり、イスラエルにおける遺跡の活用は世界でもいち早く進歩を遂げていた分野であるが、日本ではごく最近パブリック・アーケオロジーとして注目され始めたばかりである。ハイファ大学考古博物館で行っていたヒッポス遺跡の模型活用もこの一端であり、遺跡の教育的活用という側面から、また社会科教育におけるアクティブラーニングという観点から大変参考になる。これを活用した今回の活動は社会的貢献のあり方を示す好例といえる。

コロナ感染症問題により計画は大きく変更を余儀なくされたものの、鎌倉女子大学学術研究所、鎌倉女子大学生涯学習センター共催の国際考古学フォーラム（当初予定 4 月 14 日 資料 1-4）が、令和 3 年 1 月 15 日～2 月 25 日にオンデマンド開催された（資料 5）。これについては遠隔業務委託費をその他の経費から流用した。

鎌倉歴史文化交流館（4 月 11 日～25 日）と国士館大学イラク研究所展示室（4 月 30 日～5 月 26 日）で開催予定だった展示についてはそれぞれの事情によって中止されたが、古代オリエント博物館での展示は延期後の 12 月～1 月に開催された（当初予定は 5 月 30 日～7 月 12 日 資料 6）。

古代オリエント博物館での展示、および遠隔講演会では、鎌倉女子大学学生と共同で遺跡模型を作成し、本年度から本事業の共同研究者である古代オリエント博物館研究員の高見氏の協力のもと、教育普及活動を行った成果を盛り込むことができた。コロナ禍によりこの模型を活用したより発展的な活動を行うことは叶わなかったが、前年度終盤より早めの準備にとりかかっていたため、幸い遺跡模型を完成することができ、またこの成果を上記のような展示や遠隔講演会のみならず、学会発表（EAA）や論文（鎌倉女子大学学術研究所研究紀要）として公開することができた。

なお、展示や鎌倉でのフォーラムに使用すべく昨年度に作成していた冊子やチラシはこの際の学生へ

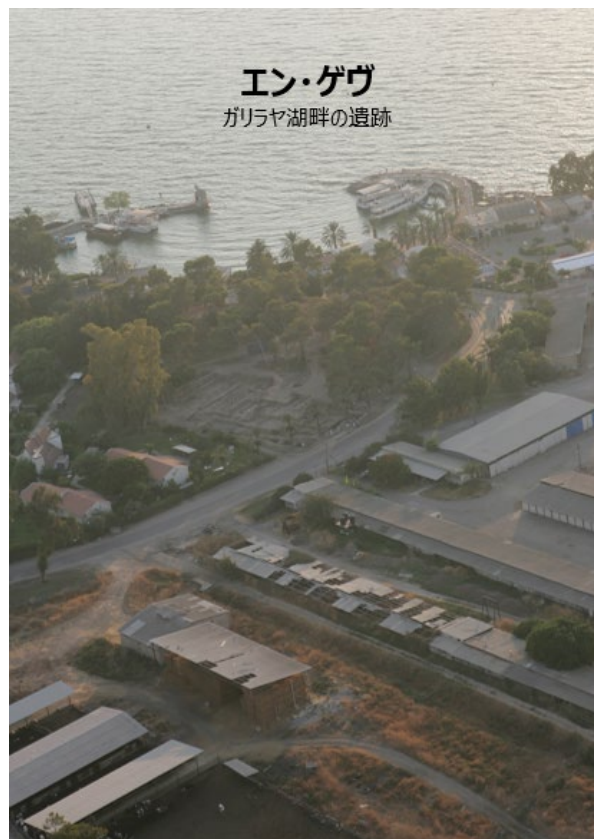
の配布資料として活用し、また、原稿をPDF化し、オンデマンド講演会の配布資料として配信した。こうした一般への成果公開は好評で、約150名が参加した。また、公益社団法人日本イスラエル親善協会広報紙にも概要を掲載させていただいた（資料6）。



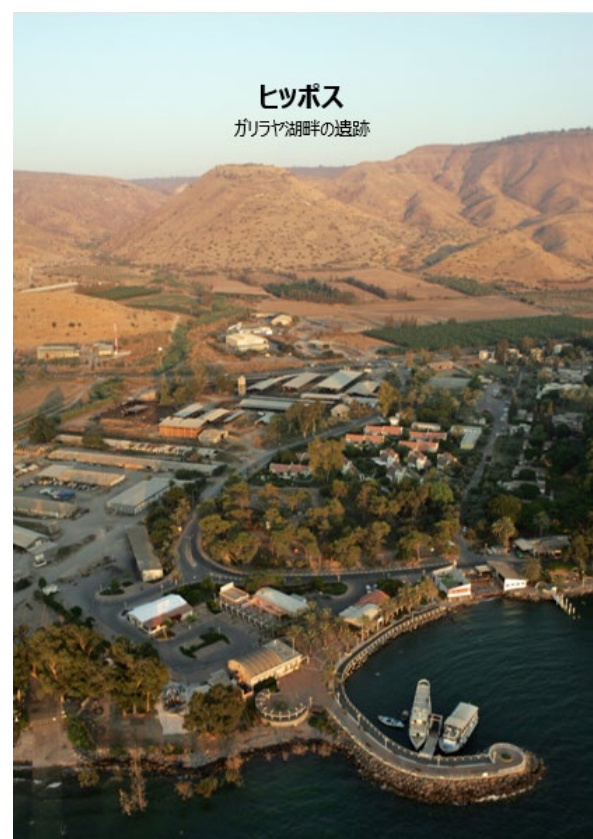
資料1 フォーラムチラシ



資料2 フォーラム配布冊子（表紙）



資料3 展示ガイド『エン・ゲヴ』（表紙）



資料4 展示ガイド『ヒッポス』（表紙）

ホーム画面 - コースを選択し、学習を開始してください。

☐ 未完了のコンテンツのみ表示

- コース一覧
- Remote lectures

コース名: Remote lectures

終了率 90%

Remote lectures on two ancient sites in Israel

コンテンツ名	種類	進捗率/得点	最終学習日
  ごあいさつ・配布資料 About the lectures, handouts(in Japanese)	レッスン	100	2021/02/17
  全体紹介とエン・ゲヴ遺跡の概要 牧野久実 Lectures as an introduction and on 'En Gev by Kumi MAKINO	レッスン	100	2021/01/04
  ヒッポス遺跡の概要 アイゼンバーグ・ミハエル Lectures on Hippos by Michael EISENBERG	レッスン	100	2021/01/04
  ヒッポスとその周辺から出土したコインについて 江添誠 A lecture on the ancient coins by Makoto EZOE	レッスン	100	2020/12/25
  ヒッポスとその周辺から出土した釘について コスカネン・ニナ A lecture on the ancient nails discovered at Hippos by Nina KOSKANEN	レッスン	100	2020/12/25
  遺跡の模型を用いた教育普及活動について 高見妙 A lecture on the active learning method for understanding archaeological phenomenon at Hippos	レッスン	100	2020/12/25
  考古学なんて初めてという方に 牧野久実 Supplementary lecture on 'the excavation of the ancient tell' by Kumi MAKINO	レッスン	100	2021/01/04
  連動企画 Other event	レッスン	100	2021/02/17
 講演会全体の感想 Comments and questions	フォーム		
  ご質問への回答 Responses to the questions	レッスン	100	2021/02/16

Powered by 

資料5 遠隔講演会コンテンツ



資料6 古代オリエント博物館での展示

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本研究に参加した若手研究者としては、日本側の江添誠氏、高見妙氏、イスラエル側のコスカネン氏が相当する。今回の事業は彼らに良い機会となり、また今後に向けての課題を提供したことは間違いないが、渡航ができなかったことにより実質的なメリットはなかったと言わざるを得ない。江添氏は3D 画像作成のための現地調査とイギリスにおける学会発表の機会を失ったし、高見氏は専門の教育普及分野を先進国であるイスラエルで現地調査する機会を失った。コスカネン氏はヒッポス遺跡出土の金属製品について継続的に調査しているが、来日が叶わなくなることによって同分野の日本人研究者と直接的に交流する機会を失った。こうしたやむを得ない事情はあるものの、将来に向けての関心の芽生えや課題までを打ち消すことはできない。ぜひこの事業での経験を今後に向けての良い機会と捉え、キャリアアップにつなげてもらいたいと考える。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本事業の実施によって、エン・ゲヴとヒッポスの出土資料比較研究の準備が整った。イスラエルへの渡航が可能になり、またエン・ゲヴ資料が保管されたキブツへの出入りに懸念がなくなり次第、具体的な比較研究を行いたいと思う。江添氏の3D 画像試作についても同様に今後実施したい。また、同様に今回行った胎土分析の結果を受けて、別の土器片についても同様の分析を行うことで、ガリラヤ湖東岸地域の窯や土器流通形態に関するより正確な事情を研究したい。

本事業による実物展示はコロナ禍によりほぼ叶わなかったものの、今回の交流を通じてイスラエル考古局広報および外部資料貸し出し担当部署とのルートが開いた。東京国立博物館担当学芸員にこれを繋いだので、今後はより大規模な形での展示が実現すると想像できる。また、遠隔手法や遺跡模型を通じた社会科教育についても今後さらに異文化交流および教育普及効果の研究として発展させていきたい。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞など

特になし